野村生涯教育だより

No. 436

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

（公財）野村生涯教育センターのシンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、基本理念「自然観＝Nature」の頭文字を表している。

もくじ

● 敬老の日を祝って
● 地域との交流を通して
● 思いを繋ぎ実現した運動会

氷上に舞うセキレイ

新型コロナウイルスの発生が確認されてから令和五年一月で三年となった。この状況下、ロシアによるウクライナ侵攻、地球温暖化など、人類は待ったなしの課題に直面し続けている。

当センターは、コロナ禍の制約を受けるなかで縮小はしながらでも、活動を通してメンバーそれぞれが自己教育を主軸とした相互教育を行っている。

今号では昨年行われた高年講座、公民館祭等の地域活動、運動会を通して教育の目的を正し、一人ひとりが人間性復活をめざして取り組んだ「野村生涯教育論」の学習と実践化の教育作業を取り上げてお伝えする。

敬老の日を祝って

十月十三日（木）、高年講座が当センター第二研修会館で行われた。例年、九月の講座において金子由美子理事長出席の下「敬老の日」をお祝いするが、七月中旬から九月にかけて新型コロナウイルス感染者数が増加したため延期となった。メンバーの多くは戦争経験者のため、今の社会情勢・世界の状況に胸を痛め、危機的状況だからこそ学びたいとの願いを持ち続けた。その後、感染者数が減少した十月に七十五歳から九十二歳の十七名が参集し、講座とひと月遅れの敬老の日を祝うに至った。

午前中は「第三章　野村生涯教育の人間観　2．本質の開発を阻むもの」の講義を平尾嘉代子さんが行った。

昼食後、金子理事長は参加者一人ひとりにお祝いの言葉とともに記念品を手渡し、受講生を代表して坂本和子さんが日頃の感謝を込めて理事長に花束を贈った。

そして、コロナ禍で三年ぶりに参加した幼児教育部の子どもたちが歌とダンスでお祝いし、会場は参加者からの大きな拍手と笑顔であふれた。

続いて高年講座担当の木村英世理事が「理事長が声をかけてくださり、私もお祝いの席にご一緒させていただき本当に嬉しく思います。高年講座の皆さんの、何としても次世代に平和な時代を残したいという情熱に刺激を受けています。これからもお元気で学びを続けていただきたいと思います」とお祝いの言葉を述べた。

その後の全体討議では、Sさん（八十代女性）が「娘から『お母さんはいつも何が言いたいのかわからない』と言われます。例えば娘に『リンゴある？』と聞くと、今まではむいたリンゴが出てきましたが、最近は『あるけど、どうしてほしいの？』と聞いてくるのでうるさいなと思ってしまいます」と話すと、理事長は「『今食べたい』と言えば皮をむいたリンゴを持ってきてくれると思いますよ。私の両親は皆さんより歳が少し上ですが、父や母のことを思い出すと、数十年前の日本は寡黙なことが美徳だという時代だったと思います。今は当時に比べると世界との交流も多くなり、相手にわかりやすく話さなければ理解してもらうことはできないのです。お嬢さんはそのような時代に育ち、もしかしたらいろいろな解釈ができるので、Sさんの意思を確認したいのではないかと思います。

口に出すことは言葉が相手に伝わるだけでなく、意識も一緒に伝わるのだと思います。言葉は心を通わす手段で、私たちは言葉だけを受け止めてしまいがちですが、自分の思いが相手に伝わると自分が楽になることだと思うのです。ですから創設者がこうした場を設けてくださったことにとても価値があり、ご自分の気持ちをわかってもらう努力をすることは貴重なことだと思います」と述べた。

Dさん（八十代男性）は「私は戦後に思春期を過ごし、学校は焼け、先生もいなかったので、きちんとした教育を受けられませんでした。先ほどリンゴの話がありましたが『リンゴを食べたいけど、リンゴある？』とそこまで言わなくても、というのが私の感覚です。一言言われたらその意味を考えなさいと親から教わってきたので『リンゴ』と言われたら『リンゴを食べた

いのだな』と思い浮かぶのです。皆さんの発言を聞き、これからは若い人にわかりやすく話す努力をしていきたい」と述べた。

それに対し理事長は「感覚的にはDさんのおっしゃることはわかりますし、それが悪いと思っているわけではありません。日本はほぼ単一民族という歴史的背景のなかで、阿吽の呼吸という文化を持っています。戦後、教育と言えば知識を得ることとなり、そのなかで創設者がいろいろな歪みを感じられ、この学びを進められました。

孫子の代は、以前にも増して世界の国々と共に生きていかなければならない時代になっています。外国の方たちとの概念の違いを理解することの難しさもあり、一つの言葉から発想するものが違うわけです。そのような時代を生きていくお孫さんを理解していくことと、阿吽の呼吸は素晴らしいと思いますが、言外の雰囲気や感覚というものを受け取ることは平和を維持してきた日本人ならではのことで、その大事さを是非伝えていただきたいと思います。

また、学校で読み書きを習うことがきちんとした教育だとしたら、世の中は良くなっているはずだと思います。しかし人としての教育がなされていないから、戦争や銃の乱射、さまざまな悲惨な事件が起きているのだとしたら、Dさんたちは別の観点のところできちんとした教育を受けていらしたのではないかと思いました。そこが自覚的に受け止めていただけたら、私たちやその先の世代に伝えていくことを思われるのではないでしょうか」と述べた。

Sさん（九十歳女性）は「講義で理事長の年頭の言葉に触れていましたが、民族や国の問題も個人の問題、課題として自己開発することだと学び、核のゴミ、温暖化の問題をどう自分の問題にしたらよいのだろうかと自分をふり返ってみると、日々の生活のなかで、私は自分のやりたいようにやっていることに気づきました。同居の孫が脱ぎっぱなしにしている洋服を、嫁からは放っておいてくださいと言われても、我慢できず畳んでしまいます」と述べた。

最後に金子理事長は「Sさんのお話から、ロシアとウクライナの戦争、北朝鮮のミサイル発射実験などが温暖化を助長するような自然破壊をしていることを考えると、本当に恐ろしい現実を目の当たりにしているのだと思います。自然破壊の要因に繋がることとして人間は自己のエゴや消費文化のなかで、自然を収奪してきました。私たちは戦争や自然破壊の問題を生み出すものは、人の心だということを学んでいます。Sさんのように、自分のなかのこだわりを消化するために、ついついやってしまうことはよくあることだと思います。そのことを課題にする点と、九十歳になってやりたいことがやれる心身の健康をご両親に感謝されることかと思いました。

私たちは無いものを悲しむ方が多いですが、在るものにどれだけ感謝できるのか、一瞬一瞬をどれだけ貴重かと感謝する延長線上に、戦争を回避できるような要素があると思います。今、非常に悲観的になる要素が目の前に繰り広げられていますが、それでも在るものに感謝するという気持ちの中から、何かが生み出されることを皆さんと共有し、願いたいと思います。

そして、大事なことはまず自分をわかってもらう努力と同時に人をわかろうとする努力のなかに、次の段階が生まれてくると私は信じていますので、時代を背負ったなかでの皆さんの役割と、若い人たちに対して理解をしていく努力を是非共にさせていただけたらありがたいなと思います」と述べ、会を締め括った。

地域との交流を通して

当センターは全国各支部・連絡所における講座や勉強会などを地域の公民館等の公共施設で開いている。

各支部・連絡所では、公民館との関わりを長年にわたって深め、公民館祭やイベントに毎年参加してきた。

昭和二十四年、公民館は社会教育法に「市町村の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする」と定められ、その設置の目的は「戦後の荒廃し、混乱した社会状況の中で、新しい日本を築き上げるには教育の力が必要であり、その一つの核として、公民館の設置が提唱され、郷土再建の拠点としようとするところから」とある。

野村生涯教育の基本理念として、生涯教育の五つの定義の二番目には「統合教育」がある。自然と人間の関係に基づき本来、家庭教育、学校教育、社会教育は有機的相関関係にあり、分節化した教育の統合の必要性を説いている。その教育観の実践として、積極的に地域と関わり、公民館祭にも継続して参加してきた。

今年はウィズコロナということもあり、制限がほとんどないなかで自主的に感染対策を行い、各地で開催された公民館祭などで活動紹介を行った。

静岡支部　十月十五日（土）・十六日（日）、第三十七回南部公民館まつりに参加し、六十周年記念式のパネル展示やポスター展示、書籍、機関紙の展示で参加した。

来館者から「昨今、子どもの問題が表に出て来なくなっている。横の繋がりが希薄になっている今、センターの活動の意義は大きい」といった感想が寄せられた。

群馬支部　十月十五日（土）・十六日（日）、笠懸地域文化祭に参加した。スタッフは、創設者の未来を願う思いと強い信念の上に、センターの歴史があることを確認し合い、展示物を選定し当日を迎えた。

スタッフ各々が来場者の話に耳を傾けた。「自分のことだけ考えていたら、このようなことはできない。海外の貧しい国の現状を見ると、心が痛む。支援をしているのですか？」と訊かれ、海外支部の活動をはじめ、ユニセフや難民を助ける会を通しての支援についても伝えた。

茨城連絡所　十月二十一日（金）・二十二日（土）、茨城県県南生涯学習センターにおいて活動紹介、パネル展示、書籍展示。

展示を見学する中学三年生の女子に活動紹介をし、九・一一やロシア・ウクライナの戦争の話をする中で、創設者が二〇〇三年のイラク戦争直前の年頭の挨拶の中で「平和を願うということは、最も簡単に言えば嫌いな人をなくすということ」と言われたことを話すと「日頃のことに通じるのですね」と感想を述べていた。

愛知連絡所　十月三十日（日）、豊橋市民センター「オレンジフェスタ」に参加。

創設者が二〇〇一年の九・一一後、ヘラルドトリビューン紙に出した全面意見広告を見入る方に、ユネスコ憲章前文の「戦争は人の心の中に生まれる」ことを具体的な問題を通して学んでいることを話すと「そうですね」と感心された。また高校の教師からは「コロナで今までのように学校行事が出来ず、主体的に考えるようになった。まず教師である自分たちが考えないと子どもたちは考えない。ボランティアで主体的に活動することは貴重ですね」と感想が寄せられた。

山口連絡所　十月二十九日（土）・三十日（日）、下関市川中地区文化祭に参加した。

各地域二年ぶりの参加にあたり、スタッフで話し合いを重ね、地域社会にこの学びの価値を共有したいという思いを持ち、一人ひとりが主体的に参画した。コロナ禍の中でめまぐるしく変わる条件や制約の中でも変わらない価値を自らに確認し、地域の方々と話し合う貴重な機会となった。

思いを繋ぎ実現した運動会

創設者の「地域社会ぐるみで子どもたちを育てる」という願いを受け継いで、例年本部、地域支部、青年部、幼児教育部から一八〇名を超える参加者が集まり開催してきた「秋の大運動会」は、コロナ禍になり、一昨年度は当センター第二研修会館で子どもたちのお遊戯と修了生による組体操のみを行ったが、昨年度は感染状況を踏まえ開催を見送った。

幼児教育部の母親たちは、今年度の運動会について八月から話し合いを重ね、何処でどのようにできるか考えていた。責任者のJさんは話し合った内容を幼児部担当の理事補佐に繋げるなかで、先輩理事からの「大事なことは修了生、そして子どもたちの思い出を作ることなのよね」との助言を聞き、自分たちの意識を見てみると、本部の席や音響機器などをどう手配するかなど従来の運動会の形が頭から離れず、そして感染対策のことも考えるとどうしたらよいのかもわからなくなり、運動会のことも考える気がなくなっていた。

このことを聞いた理事長から「あなたたちは、どこに重きを置いているのかしら？」と投げかけられたJさんは、理事補佐にありのままの気持ちを聞いてもらい「運動会が子どもたちの楽しい思い出になるように、その軸をぶらさずに考えていくことだと思うよ」と具体的に助言を受けた。そのことを母親たちに伝えると、段取りなど形ばかりにこだわり、本来の意味合いを忘れていたことが皆反省となり、意識を切り替えた。

そして、日時の希望を上げ、十一月十三日（日）と決まったが、Jさんはどこまで参加者を募るかを本部の判断に委ね待ちの姿勢でいた。そのような意識の母親たちを心配した理事は「日々コロナ感染者も増えていて、ギリギリまで開催できるかわからないのよ」と話し、母親たちは最後まで主体的に考えることなのだと気持ちが引き締まった。そして改めて母親たちは話し合い、感染状況を考え、幼児部だけでもさせていただきたいと願い出た。理事長はじめ本部は母親たちの願いを受け、今回は幼児教育部のみでの開催とし、本部を代表して研修・地域担当二名が参加することとなった。

運動会当日、会場の代々木公園丘の広場の木々が紅葉したなか、幼児部の家族と祖父母も参加し行われた。開始前にJさんは理事長からの電話で「子どもたちにとって楽しい運動会になるように願っています。そして参加する研修・地域担当に繋がり、親としての自覚を持って運動会を行ってください」と言葉をもらい、この場に参加せずとも皆さんから寄せられる思いに感謝になり、母親たちと共有した。

参加者全員でのご挨拶、ラジオ体操の後、徒競走、お遊戯、修了生による組体操など六競技を行った。子どもたちは思いっきり走り、ダンスをし、幼児部を修了したお兄さんお姉さんたちが作ったお手製のポンポンやメダルで応援し、子どもも大人も楽しい時間を過ごし「子どもたちに楽しい思い出を」との願いが実現できた。

翌日の朝礼でJさんが運動会の様子を感謝で報告した。そして理事長は「今回そのような運動会になったのは、幼児部から担当理事補佐や理事長秘書、そして理事、理事長へと思いが繋がり、その意識が循環したということだと思います。こうした目に見えない人の思いがあったことを忘れないようにしてください」と話した。

コロナ禍という制約のなかで、母親たちは運動会を通して、目に見えない思いを繋ぐ大事さを実感をもって受け止めた。